菊乃千壽仙 全

特別
へ5
6064

八5 時
6664

帝國圖書館藏

菓子　蓮二房

世かゝ一番の潮ぬる夜を菓をすゑ
人世小稀ゝて東公離むかゝく雲小
きゝなれ南山をのつゝ重小かゝる色より
人間の花葉小法のりて杜冊をゑゝ
苟茶をゑゝて、きゝ小石乃義我
あゝ我ゝ小ゝ小ゝ我我の万菓小
集よゝ菓をゝゝられすと世ゝゝられと
屋原う我ゝ梓小梅を言れゝるきゝ小大

帝國圖書館藏

57-2417

あるて奇人もさ菜の手代をさ〜つさ詩人を
むの源色ふとそもあふす色てけ拍を肢ふよ
咲てをのうまあるる色さ菜のかさちるを
さりれを寶永のはあよう夷洛ふけ
むをもてをやるて玉籬金墻の氣を
いさひ製簾細締乃ねを寶ふれらめ
價を枯冊をあるさひて一とを菜柘
をかてりんされハ寶ふけ價のあされりを
いふ屏一弟一よ淡濃の色をさるる身
二ふ毫量のすをはるれふ大あるはハ二尺よ

及て菜ふてて菜ふあるさる和もおはる
屏むりを和寶紅乃ろりう
金績銀績をるのをかめて小金めぬき
乃似るるるん濡醫れはのれよ淋ろる
を今るを色の色ふるも書猫巻
といひ和ひといふ金鳥銀風れふふ
よられて巻かのちをかるるさん
やうふ笹のこふさようさ〜のてなて
中〜ふれるて和れふ屏さ後ふあれ
法法村為を寶永の末よひいで小多巻

李白軍ハ正法のはしめ品あります(て)ハ
漢家の菓の譜よりもたくさんなるものあるさ
あるゝんゝ弥風やいせの国よりゝ菓子と云
菓ありてあふうしの家ハ秘蔵あるふ
尾張よりきかこゝあり義濃小白川龍
ありまして松よりちさちゝハその名
をかそふ松よりゝ毎あります大唐ハ唐菓
の月下作もあつ〳〵宮居ふ人ゝ傳
あゝ新渡の菓物ハ名ふ所ゝて伊冊よりまゝ
とゝふ菓を渡部の家ゝあゝ松名

あゝと松さて宮ハ麩(ナギ)饅頭(リダ)饅頭あり
傳頭といふ抱頭とゝふ遠頭ハ名れきよゝ
あるものまて大小ともふおのかゝをかむる
あるふ厨子頭ハ名菓のよゝ法ゝあれまゝ
名の大あゝんをとゝかゝとハすあれさて
松の名乃辻をさゝてハ鮓(ザイ)といふ丁ゝと
ふ金銀黄白の糸ちゝとうれさまと遠て
まゝふまゝて松をよゝとすせさる和ハ
すをていあゝ一ゝのかゝちあゝゝ今さゝ
菓新の椀干小かやさて朱家松小ゝきに

なりゆきまれ心地もすぐれ正徳はじめ
の都の菓合より百代迄双のもをあはせ
中ほどに小金地蔵あり右小菓金竜
あり朱雀門の外に小堂をはべるあり
いづれ新の三小門にはれたるあり此の
内の金不をよみあるべきは此菓を
何はせんの人の後羅をさしむとも及
ばれあるべん諸小むしよう水陸
菓子のもかかりてはいづれの世に竟好
を何はせんまも今此此物の菓実を

はべりて遊ある所よりそんとするすは世小
はの変化何まるあるよりて世小はの変の様
あるべしされて此子の此伯色を同国の書
をもの文代心中よりの菓の中の物化をえらびて
賞平の菓合よりもはべりくらんは様るよ表
秋の色てもあるべ敷よりの表の表のおそれ
もあるをのしかは小菓のかるちをるかて
はのしくよはのあるを宮むるよ翔はさを
くに子代の二字を重てむ中の湯の名ゆも
めてあるんはの様敷のはして二日あるよは

和歌の二字を色あきて家のかこともこそ
かなきにあらんをやこれ三ヒ義州のたさらをよそ
ぬもやはしかしひさしくかれとそよいはるるを
言の葉あやをあらてよう葉又かさなの
名を拾さるハ清くしく人のよう月よりもとも
こやこ人の拙の名をさるを風流いれ
をうゆ〳〵拾ハさらんこにもさいるれ詠よ
よせて葉よむ〳〵起の名を拾〳〵さよかつハ
ゆ〳〵病のむれ字よりもひく〳〵ちらん七ヒ八ヒを
温泉のさるふきをいひていつまも手化イ

手時の風情をかむ角〳〵さて九ヒ葉
のめて手文にあるよ名月の二字をたゞの
摸拓よ動て中よけ葉のもやうあらんを
をよの葉合れよ拾すてけおぬ〳〵
ゆまの〳〵れ中ヒす金て十色の辛を
ちよかつて生花供養乃三字よおの
名乃ふらくれを色を化俗の葉合
いひて世色世桐の起よいよ角を也
ひあ〳〵の詩人を山を賞〳〵千金
もかつよりそれを今れ作ハ

一字をもて万の万あふきうとゝ学
より他国の人乃艶義をさゝすれる
花壇の家北富者をふくむよ似れと
おのゝ乃ふゝその家の主地あくゝ蓮二を
その乃ゝ弟を河ゝうゝめて今ゝゝ人
あゝめくまれぬ合点乃ゝ

正治甲午菊月

朝日

朝日を千代のゝ奥家花　暁鶏
中酒ふかゝ酒も三献　伯兎
乃水ゝゝ乃ゝ乃風吹ゝ　房
東ゝゝ乃ゝ帆柱　鶏
見渡ゝ乃ゝ深芳村濃　兎
ゝ年ゝ乃ゝ奥家ゝ　房

廻板ハ三度廣一丁拍子

本芝居の張紙ハ金八徳三度

嘯ハ今ハ赤ハ

ふまへてそつすると乃ち紙

積す金三二百すもすてるぬけ

紙へもいまかれ弓張

羽鮮の秋を弓引と伝ふと

中ゆやすらあハあと新ゴ矣

嚢

兎

房

嚢

兎

房

嚢

兎

房

嚢

兎

あるを新地の芸れ弓を以

風乃重雀の声もときすく

と火鉢ふきくとあれと砂金乳

度ゴめてきよ梅の根

赤尺てもと〳〵くちゐ盗るれ

食のもくふひきえ波く

物小本ようの名を潜る永雪

以本四ら役布も我を打てら

房

嚢

子定の嘘も男は一義とや　兎
かけつとうし恋の浮橋　房
名さ次緋むくの新は二階ら　蘆
桜皮やきの香をさ拾ふ川風　兎
月の見えてうれ恋ふ佐ちされ　房
女子の声乃ちゝ次申心　蘆
墨汁紅ゆゝねと月小雪は恭　兎
奥より美て摸蘆乃行　房

元次のり糸もちあす長振蘆　蘆
雪端ち掘ふちゝむ分別　兎
一町う喧嘩の改乃様月侵　房
ちちふ思義れてと切と吟ふ　蘆
り美ハせ子ちゝもとあるまて　兎
汗涙の少れちゝ今年も　房

二日

塵生

伊勢かたまつふ菜や初花　伯兎

猫柳ふ除雪簾はしをぬ　貝宗

お彩ふ此ふ蔵を掃除て　乙甫

小ふ物寄も入る時八末ぬ　兎

伊勢の国ふもおぼ一ふあう　生

凡かうして屋のまち此ふ

秋吟ふて庭て居る牛ふ二三疋　甫

ふかうと去こうこう（元度）　宗

秋信やたふ（水ヨリ）埃をあ去ち　生

雛　水さまふ雛ふ夕月　兎

雛ふ去むかし　赤ふ去ふ此窮所ふ　宗

むさふの弟ふも色色やう　甫

伊の独を振ふて子ふ生まれ　兎

脂ふ去ふ去ふ去ふ去ふ去ふ去ふ　生

ごとき世にて其小柳乃結むこ　甫
舟常一柄をとく庵の白　紫
法師の法小俗やゝ稀なる　生
余は世を捨ぬる今れ白雨　兎
侍吹うらかきて姉と妹川　紫
親小世めさ田ふも貧福　甫
法淡の下を世嘘かとおもふる　兎
薩ケ世廣い国と世ふ　生

せんと茶も世淡こあて蓬濃　甫
解ふうふ小師を迎よれ　紫
俗是ふ小仏へも特ふ祇　生
俗淡ふ嘆ふ世ふ仏　兎
別淡の屋蒲八幡ふ月あれて　紫
芋の茶ふあれ世分祈る　甫
淡柳の世ふしおれ秋の色　兎
名を仏ふ世ふの信祇　生

雙六をして遊ぶうちに
持病をこらへて夜食うかゝ　甫
見れども水流の俄のすまを淋し　紫
東へ水乃ゆく糸をまつ　生
時の雲八ちやくい茅乃雲　兎
雪見ぬ人ぞ嘆　紫
　　甫

三月

今日の伊勢物語　播州
萩萌すまゝ　伯兎
端午　桃妖
月出　眠龍
五月雨　兎
指人形　東

川越の絶子の幕をとりあげ
書うつし八橋の絵
夜ひとつ片俵の秋はうり
けむりすくしすくし首尾繁
多ふ妖怪ト姫しなこの月
吹人ちまこふ沈屋の蓑笠
ひ蓑の水ちやくく明ちるれ
変ちから紙のかいもち

蓑
妖
東
兎
妖
蓑
兎
東

柳もはやしくいかちあれ
茶屋の絵義を男一疋
吹絵をめくる鶴小寺の茶
水小柳乃ノ蓑をまり
菊入ふちちふをいちちさ
けあ柳を今朝も一疋
屋根葺長屋根(茶屋を約あげて
ひ伏なれを天気ちよ

蓑
妖
東
兎
妖
蓑
兎
東

小侯小侍門之殿乃々之乳　蠱
苦おうゝ乃ゑを石橋　妖
かゝゝと鳥も情化物の日　東
笠人々ゝて、唐てとゝむれ　兎
傘を杖ゑ法ゝ山法ゝ石　妖
運乃法ゝぬゝ家ゑ作の子　蠱
枝杖の蓮ゝこちらゝゑを入て　兎
瓶乃作ゝ小法ゝ物ゝ　東

墨ゝゝハ嘘かゝ杖の照あゝ　蠱
ゝめゝゝゝに餅の着板　妖
髮孫ゝゝる呼んゝ嫁ゝれ　東
上有ゝ乳ゝゝ乳を行ゝ　兎
蛾ゝゝハ蛾の孫ゝ二門ゝ　妖
松の枝ゝハ狐ゝ乃ゝ云　蠱

四日

よう家や湯入の中ふ筵笠人　巴今

云の家ふあれていろ〳〵の秋　伯兎

月ふ雲面白不肖月ハ影さ〳〵て　昨蓑

四ツ月漢子ふ幸乃影さ　朴人

行縄よあいてゐるものふあり　播東

馬も能ゆつて供のものも　乙甫

夕ぢふ涼の手ぬぐひ私　兎

明初ふよる夜乃村雨　今

若仲よハ家せれ面ふ減あり　人

後ヲ生まてハ主を迎席　蓑

縫箔よ乳母の手ふ髪の仮今　甫

梳形おそえて片寸子盃　東

うゝ心柳よ月の影の細さ　今

昨日暑さ〳〵夏理も頬赤も　兎

長谷川さきかうち中八郎　蠹
風も吹よりとはさきかうち　人
青園の桑史ふ秋を知さめて　東
陽氣の色ノ秋ふ踊子　甫
高深の宮ちこ吹かゝよる秋　兎
帰路のほはもうしふ学　今
九月朔日三井の役場秋清れて　人
陽氣もさめぬふ夏富高甫　蠹

嫁掃の第ふ雪北葵を蒔る　甫
中六歳の嫁掃こ了　東
好水ふ人間の冥も不破寺　今
うれしうめされ孤の秋心　兎
高もたゝ孤の雪路ふたちて　蠹
孤庵子ふ一盃乃狂云　人
法利も記てさゝふの月　東
秋の夢ふ枯風秋吹　甫

絵よ書も何の術さを芸房　兎
小海ち極小立て作麿生（モサン）　今
福笑や隠りのうさと積かさと　人
ちんれは和尚も恵　蘿
美味そひも若ふふ味むれ　甫
角を蔵て廉も書し　東

五月

載いて菓の白ひや又かさと　朴人
和菓形をく慶蓋の数　傳兎
作るまてよあるまて月をえ弼て　播東
宗も験祖示をさきれむ　人
家中まちのとあるとも　兎
柏債の師の一字千金　東

海はるかなる松を吟ずれば　人
孫のきれたる新ちまん　免
忘れ布風呂敷の義也　東
小家はうしろ在五中将　人
踊好はいさ青乃園ちまん　免
独分も吟ずるを観音　東
さらば稽の加茂をまふ浦ちま　人
待を作ねと影をうつす　免

如何も乗う紀をふ思美かう　東
さい推さあて味す善漢湯　人
治郎が家の井戸ハ酒北美　免
嫁を立ちて猫も恋する　東
離れし婚乃吳見ハ云ふ　人
されくらあと小祝かする　免
移の吉於入　拍を鳴けり　東
ちらし接を丈東坂か　人

あるをとあれよ峰まで鳴の秋　兎
ちるを好みあれとて下れ仙人　東
ちる唐崎も古き都小野の里　人
秋の淵ふかきを知るもみぢ葉　兎
一本の柳より起れる秋風　東
立てしらべや馬小屋毛氈　人
唐糸小月うしろ姿と川の面　兎
吹くねとも秋の名残ふきあつ　東

南を指さす新小丁乃声　人
焼の海ちるを惜む秋の月　兎
秋むまの葉とひらひら桂の雲　東
孫を抱く庭の楽〻　人
訳すれば雲八幡つくへ清さや　兎
独猫やひるを出ても禁も　東

六月

さいきのむく紀蹟　今釈北菓　乙甫
山乃徐　我和のひゝ独　伯兎
月小星竹よ　雀乃幕寄て　昨蠢
生鋼ち　新演のいさほし　甫
こゝまゝ早(すで)北風の思くもり　兎
荒乃陰子小去のまおゝ　蠢

ぬ〳〵徐と八ちておこし聲反　甫
そゝ秋乃人くと売れおく　兎
うき時て史雄を出のかゝ里　蠢
さゝやゝ行のいさよ北国　甫
聖夏の行さゝ　兎
蒲ち　ち　ち　ち　ち　蠢
北国夏の名ち　小長刀　甫
行ちよ　犬も　乞　兎

植ひとつ殺せとあちらへ死之
　　義
　　甫
　　兎
　　義
　　甫
　　兎
　　義
　　甫

言をかきうふ仕ふ仕ふ仕永
　　甫
　　兎
　　義
　　甫
　　兎
　　義
　　甫

寿よりあ月ふ
　　甫
　　兎
　　義
　　甫
　　兎
　　義
　　甫

雑子の拍子ふ庭て七屋寸
　　義
　　甫
　　兎
　　義
　　甫

をつつ書北機猛乃ま平
　　甫
　　兎
　　義
　　甫

竹植て足浴ふ系の湯ふ北玄仇
　　兎
　　義
　　甫

弓ふ子を京ふ濃ふやあも氣寸家
　　義
　　甫

中六日ちさちの祝ロ
　　甫

味噌濃も杉子も陰ふ一而常
　　兎
　　義
　　甫

路の前つまま城とふ
　　義
　　甫

強物の枝のロ新を長ゆき
　　甫

嫁をとろまと参る油屋
　　兎
　　義
　　甫

而性も美濃をいてて所寸
　　義
　　甫

軍書を足ぬて寸ふ八嘘
　　甫

拍子のふよう寸ふ月の新
　　兎
　　義

麻も入るきの屋ふ風史
　　義

前生てゝ留もゝ秋雁　甫
お髪作る寺乃まゝ　兎
さゝやけき八百屋乃仏合点　蠡
ぢら〳〵雨う連ゝ八ちる　甫
幸〳〵小出る蕨北彩〳〵　蠡
独小弱あれをひる弱　兎

七日

百合小菜乃蕨もゝ一廻る　之川
竿小湯元の桔梗かるゝや　僊兎
羯鼓うり児を化粧と月さして　子人
現世安の梅すおり〳〵　李弓
二丁九北橋よ法さて馬場の松　和什
ふるもゝあれと書もちり〳〵　乃義

芙蓉峯の後夕の霞乃あるかふ　文宋
加かの底氣も絶えぬ花氣と　川
お後美ふれしるをおつ春と　免
ゐ和あうの福を苅やう　人
蓋の月は秋ふ小雪物　弓
ひさしきを接る秋風　什
なるの美ふもむしの音と蔓　露
秋ちの稼ふ施乃肩衣　宋

感恨の家ふちのさい情ふ　川
うれをは情ねあふ呉猿全　免
ゆるしと八今年は美八芸白亞　人
ほけて雪をきた種物　弓
情さふ世界をとけて見歩　什
三味線志ゐれ声も二あう　露
牧ろしと屋敷の孫の夫風れ　宋
仕合ひるれふ乃托作　川

み風呂に入て寒うこうそく　兎

末履の吉乃何れ浦やら　人

かゝるも耳ふゆせてうハ乃そ　弓

男ひてくれ此泥乃恋を　什

おつ入川浦を新矣歩の板立て　義

洋古浦ハ只書捨てこつく　宋

朝の月かゝ　まの清ふ　川

蕎麦ひろふ　兎

思ふに紅毋も此秋果れて　人

旅をさそふ波濤不注　弓

幻行ふ夢さて吸ふ　丹の吉　什

隋の征戦とふ成仏　義

蕎を見てあるも何ぞ　宋

秋の暮ハ加例延年　筆

八日

[illegible]の[illegible]や南無薬師　之仲
かけしをを拘教弟乃月　僧兎
[illegible]時ふ[illegible]あ[illegible]れと明信て　乙甫
私民ふすふ[illegible]ふ私民　桃妖
[illegible]の[illegible]芳[illegible]心　兎
次けよ私風ふふ素[illegible]　仲

八条の中ふ[illegible]まれ親世吉　妖
[illegible]と[illegible]人　甫
芳ふ[illegible]　独川合て[illegible]　仲
[illegible]れふ行申けす　兎
[illegible]の[illegible]を[illegible]ふ風乃吉　甫
下京町の物隆(ブッサル)れふ法　妖
[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]子の恵　兎
[illegible]風ふ[illegible]清ふ　仲

茶を入るゝ牛小車湯もちんとと　妖
笠きゝと人の入るゝ板格　車
又ゝ見も恨すゝ清水月と夢　仲
都の中ゝ柳一ゝ　兎
蓮ゝ寺ゝかゝ丁乃ゝ嘉云　車
昔の近さゝ寺村ゝ　妖
紙軽の混紙恨ゝ泊ゝ書　兎
きゝゝの姫ゝ細工貪之　仲

新花時ゝ町をあつまるゝお氣月　妖
るゝ加ゝ屋ゝ笠ゝを泊ゝ　車
法ゝ寺ゝ八ゝ寺ゝ相ゝ寺ゝ　仲
髮ゝ下ゝ寺ゝ　兎
新記の鳥丸ゝ　車
今花車の車ゝ　妖
月氣ゝ寺ゝ泊ゝ歌ゝ　兎
屋ゝの糸ゝ寺ゝ　仲

孫なる名の一筆小井戸八蒹葭
僕の声北と卒も寒蟹　妖
冥性小伝孫を張ふ吾乃混　甫
蓑と拍の赤八偉義孔　仲
ひ夢も蓑の伝僕乃思淡　兎
苗代を好ふ義を作る　甫
　　妖

若月や二幅対ふふ乃菓　星冬
猿の浙くふ岩ふ蓑　伯兎
川言の時多小秋乃ふ丸て　朴人
猪を以よあぬ拍ふ　冬
大千八公ト出て伝接あり　兎
猪史てう伝ふ僕の新　人

結の末て雪北海ぬ拍子ぬけ　冬
天ちゝ雲ふ人面軟　兎
鶴〳〵と御賀ぬ雲ちゝ北哀情を　人
移会〳〵ぬ伯母ふ家の毒　冬
飛ちぬやうふ房風をひつきゝ　兎
行ぬ心ふ月ちゝ月新　人
おきゝ八船ふ名雪言行鶏　冬
五稲の白ち北廣ゝひ神　兎

詩人も見ぬ人ちゝ雲　人
比丘尼の恋ち釈迦の月　冬
雲の戸ゝ明て夏余ぬ北蓑　兎
宗一部を見せぬ雪　人
言れて八風ふちゝ雲乃雪　冬
お芙の稀ふ神一ふ中　兎
心〳〵鶯の女房ふ相撲ける　人
きふの仏ちゝふ住ゝ　冬

宮仕まてもいつも度ごとに新たなり　兎
世事にうとくもあるとも主に大切　人
陽風にうつる新掃きてゆあひ　冬
家宣の時に秋もいつるぬる　兎
同業の次に月日を思ひうる　人
まこと生涯ふ文月乃新　冬
とうくてもそれをかるぬると蔓　兎
金の掃除に親へ孝に　人

肌ぬけて病うと人ふあるて　冬
仕勢の文月に掃ふまのう　兎
素面の秋に月ぬるうる乾いう　人
蕣の白ふ東晨八方　冬
和歌ふ八ちうるてのう業　兎
雪に書仕水ふ清ねん　人

十日

菓子屋の紫雲や笠供養　宇中
明陽子信ふ月し猫踊光　伯兎
おかるさまるくさあふ秋やかなみん　播東
机小尖氷膝のさ[illegible]さ　中
芋人魚いも松ふ吹ちるむ風　兎
お惜ち弘ふ[illegible]ふ川紅　東

嫁入とて[illegible]も[illegible]ぬ家の魚人　中
八卦小[illegible]年を問るもうさ　兎
紫屋ら細[illegible]法華寺　東
廣い碑ふ小ふも沸ふ頃　中
今ふ小ふ庭のあるも四月と　兎
苔子を[illegible]すこち孔閑的　東
昼るの紙ふ一ふ法あられて　中
吉小吟[illegible]ふ加賀の金沢　兎

廓かゝ矢倉村かゝる英軍　東
思ひしゝ小出新供乃幕　中
夏の月ぬれてもゝ石垣　免
無も後れ神の帆さら　東
張笠の雨とたゝ小二人供れ　中
的星う茶屋てすさあきら　免
初るふよ小ふかもかゝさの　東
供笠をしてまいる出特供　中

くもるやうこちの音絃かてり　免
指を屋てて他国とハふ　東
月代のふをおもてタ涼ミ　中
附る時　末乃秋和　免
ちれうも中酒よ猪のちまて　東
むすす子茶ちあれさ会　中
隠屋へちをふてちうゝ壁ア主　免
ふ徒の脈を脉よとる　東

八ツ此亭とハ兄弟れ能ありけ　中
淀小鍋乃あしもおろ〳〵や　兎
さえき職てあるゝ娘せと惜まれて　東
犢味噌好の京乃客人　中
三石のあら菜の華も咲まゝり　兎
網のさくら小鶯乃梅　東

追加序

伯兎かつて此山峡小あそひてなしめて
蓮二房小もてあされ桃亭小二笑の
交をむすひしかもれぬ亭中の先
あるゐし今亭ハ二代小松の人
小従されて菓子湯中の此名をかつて
此十あ他の亭るとハあらぬもうれを
金祢の一分子云より此時の菓子あらさ
まして一兄形の文庫をおくり給へりよ

はるを蓬つ小仏ノ作りて之を殯、泉の
菜河仏也さて之を第小一白乃紙
ありて湯盤のいまもとなりハ
風流小口乃乃新古を尽て見を前の
工夫とハすべし　さを蓮二房ふ
二月二月乃式をゆるされて此第の
名ものをかさんよりて永く白月乃
月此古法とあり　て此十寄仏の時を
古色さんと也

芸術

箱の石ぬけて古色し二尺弐　万子
墨絵とあるを拓小貝あり　伯兎
千寄絵千色小第乃色咲て　房
杖をかめさる宝ものあり　播東
あ小ぬけて異の完まて月此新　昨義
古石の麻此好ゆ　さ　琴之

如懸の景も改まる在原石　兎
忍ぶんかやくの名所とかゝる　房
世界はまことにもとまれ額つき　東
板金屋乃商売即妙　蠡
打嫌ひと一面浮てすまるゝ　之
恍のさゝふてゝ言乃葉　兎
我めとて宴へもこゝ重る一分面　房
孤の大工乃我と俊源　東

十月八日あるのうしかさよ　蠡
文も南しの浦乃夕和　之
ひかゝすゝ考と和かも葉小雪　兎
小児ふたりて莖橋寺　房
紅ゝ吟ふてお供も姫　莖海　東
牛さんゝ言をよんさと八吟　蠡
つ雪もさのゝこゝめて祇ひゝき　之
いつくの浦もふゝ翔ロ　兎

白雪てそ心よう庵つ記り　房
柏後ふ信ふ又拘氣まふ　東
多のくかふ物弥ゆう胡風さ　嚢
投てはしる弱乃ちさよ　之
遠蔭の肖八さかぬ棚乃上　兎
今ちやゆ弥て神八庫柿　房
敲墨も信ふ為る竜乃月　東
歌の月もあけす庵斎の風　嚢

只一相物ゆされて　時　弱　之
源年よても恵八角さて次　兎
多笠の信源ゆ毎ふ次千丸実　房
作さ雅ち孫よう　東
十年の工史ち言よ寿　嚢
千代ゆ千代を擬集乃玄　養

机右

雑色のかまくさ枕も菜ぬれた　万子

雲の乗いけすれて赤い菜の花　支考

京菜三章

文仲の奥の畑つくりや菜会　沾陽 吾仲

百菜ぬ郭公もとゝ心ぬ代　大隅 才陀

菜といふ名を仕ぶつて郭代　いせ 老史

それ天地の間の生物よりて
例のおのおのあるがゆゑに
四季のものしるし地所く富
ものうるはしくとりそなへて
よく付へ合へきもの
のかれあるれも商賈
神仏のおしへ

作兎

諸国文通

伊勢

紙屋ふと雪ふる時の
ふるあるも枯て
野ふるくもいとあるあり
やそらるいふよ野也
もの海八月よりかる生海嵐八
ふるかるふと水影八

京菟
女苔
芦本
万里
文朱
兎史

隠の字のせて此ところや錦鳥　季流

遥遥秋草たち居乃隠れ郷　水甫

香ふれとも篝よ都や梅比茶　杜草

ちる也浅ゝ世や宿ありむめの花　松有

榾の火や都小路の二三町　只止

せうさの我をおく庭て火燵かな　棄頑

待かねし浮月小示月や冬の梅　騏及

はつ雪をも御しも出でと書ならへ　詞丸

蝶掃や菊をかゝれかずかす拘　李三

はふ乃甲紙細工まて俳世く　披長

ちいさな伽すしよふれ弥婦人　曽北

暁の腹乃痩て見るや浦比秋　八菊

はちなしまでも水ふみ分るかな　乙由

はなしの秋乃ゆふや赤とんぼ　房

尾城

藪寺乃暁隠もし稲の花　露川

洛陽

吾仲

り秋や食ふとうゑく病やみ

范孚

行人の秋ふかくさめや市北者

了阿

茶よりたの咲てあくまに時雨うゑ

東伍

売うゑ者恵の輪次やあたたこ

倩嵐

駕籠八月蛾葉とあくはすてゑ

大津

尚白

もあうゑ印ゑ里の菜汁八

全

維明

膚山

大朔

表立

圓入

扣角

才陀

晩き里はふ泊れあうゑ式

時あゑ中や里一京葉北重

さい間偏復京よあひゑて柳八

ま乙安の泥やあゑびていの也川

京良園あゑの都北風地次

打て見る大枝軽き五葉う南

里ゑう中や松葉くさ紀四の社

北あ乃庶ふ志ゑゑ行ゑ八

美濃

若竹小葉孤の白き艸履乃

葉はうり行ゆくて半の拍子八

雲乃をとゝ年八惜る師走かな

長谷の実ゝもとる大雄乃

高のうち小尾乃をとゝ傳

木の葉ふるもゝ乃葉乃和

独乃ゝ乃ゝ里乃ゝ乃庵

木因

右範

野航

馬岐

六之

英次

東羽

むらゝ乃ゝ乃ゝあつて金衣

乃くゝ乃ゝてむらゝ乃後や勝負

ゝすゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ

孤悲ゝゝ大吉をあけて麻言八

雅の実めか法ゝと孫乃乃ゝ八

ゝゝの乃乃ゝゝゝ作や梅乃乃

二竹

吉便

菊伍

童平

岱童

閭如

越後

文ゝゝゝ毋芳乃小ゝゝの乃

陸夜

越中　井波

夕顔やうつくしき所　桃化
西日も峰に淋しき梅の花　林紅

魚津

名月の秋もたゞ帝子哉　秋尚
芋を煮るいとせや我よりの月　倚亮
十六夜の雲晴れやすく時ひとし　雨村

球場

小男鹿や高岳かすめて九末橋　吾秋
枯舟によりそふやうに菖蒲　其風
笠にとつこいと流れ　雲の翠　支六
七夕や合はもとて俄雨　仙布

福光

侯家うつ清水ながれ萩花　巴金
あしこまる夜ふけて孤燈代　呂仙
笑ひも焼きて何ぞ八　鳥雪

こちらへも合ふてゆりたる事　魯由
さつらんはふもあるに今梅　梅蛇
雪師の筆よ新しく物好面　音吹

石動

松もりや松よりたよる苔の雪　宇白
梅乗へ見ふまをて史雄れ　方竪

加賀　金沢

耳の底よ一度変あり虫の声　北枝

某小役の儀ニ付ても此程ハ
御丁寧あるまよ変白屋ハ
乗物よのせて海ゑやをとゝ
何事よ変ニ見ぬ事や咲書乃て
横手の市小役あれ柳載
金ちある心て分れ蕎麦冊
小杉
孤一ニあれたゝ世侍の新竹鉄

秋坊　宇中
万子
従吾
如松
孤舟
方石

石葉や笠ふるの沼撥拍　山甫
雛のるよ笑ひとりの芽子の邨　朴人
枝をのまゝ一けもあり桜月　里冬
秋の名も吉野の月の名ふ　之仲
傘打の沖おふ近て花の雪　之門
尾をかして足もとの蕨の苗代菜　乃露
菅麦切や水もまゝ沢の雲　尓弓
雨雲やかるとも見れて花菖　只三

蕨つ部川お心あ〳〵むお塚　春元
ちるゝと風ふ柳や一川稽　和什
流れて花ゝ菖乃蓋ちけ　昌柯
ふ孫よゝと雨ち流ちも時雨　文宗
夕立の蓮乃花あち蕨肩く　夕市
ちめゝ程をいひ清ゝや秋の塚　イ人
心中
ゝ瓜や姫松ちゝれてちゝまつけ　桃妖

越前

敷賀

ふくらの吹や玄瓜を丸あらう　東恕

新法師もいさゝか森をふ秋を　佳木

ちてさく南無ほうらく佛蓮はも　風虎

立寄て下戸も上戸も清みかな　東吾

心寒やおゝ星てゝむしくゝ　三吉

指小木もそゝぬ雛の不昔ふ　凡士

無のよ星ゝおもうかめ新星清ゝ　岸水

和尚の小僧屋の門乃柳この乳　既白

狗犬や膝もあをゝ弁ゝ蔦る　荷翠

鶯ゝや家ゝ八氣まれ生ゝ　霞亭

名月や野も泡ゝと人乃乳　拂袖

東ゝふもも咲や伏ゝの桃ゝ蕚　可伸

荷中

名月や一刻ゝの乃を野乃松　嵐枝

同ゝさゝや鯉をまゝすゝ蕚　不ノ

福井

かまきりや竿に負ひて　葦吹
川狩を侍る石を巣の角　子圓
乱髪を井戸小歌や鶏頭花　岩芝
地獄乃肩を井戸や文石　布六
芋虫小肩くるしや柳乃梅　龍枝
又もしも七夕もかき墨さへ　青波
外出の小末て居る蛍乳　山只

三笠

猫乃恋ひ柳陰く蟲の那　作蟲
長閑さ寺乃牡丹の折人乳　播東
何ぞ小而会乃ひ影や漆　歴角
紅葉や紅葉の梓乃杉乃猫　琴之
むらさきの花の実一滴舟　北竜
暁小鶴を啼き如雪吹の角　右夕
柳妻や坊を生る生縄を　布留

梅ばちの二仏の中ゝ涅槃の図　伯兎

百栗荘

訪雁坊

悟れとの雁もあり深麦　涼菟

雁も我の合点あり雁北帰　房

涼菟が支裸の一字を称蓮二房
よ六号の二句を未さんもの雁坊
乃東張りしら今ゝ名指

乃東小雪かりて共よりむすぶ
ゆくゝとなれあり

雁の夜明や高ゝと乃東　伯兎

三小雪の夢

おもしろさんを風乃末の翠哉　房

干時文政未のとし
初夏日

京ゝ町通押小路下ル町
野田治兵衛板